

巻 頭 言

研究の山脈を作る

金 原 和 秀

昨年富士山は世界文化遺産に登録されました。富士山は見るのは美しいですが、厳しい山です。学生の頃山岳部に所属していましたが富士山は登ったことはありません。夏は一般客が多いので登りたくないし、冬は厳しすぎてプロの世界でした。研究も同じです。すごい成果は見ると美しいですが、それを究めるのは厳しい時を求められます。

今、研究のやり方がどんどん様変わりしています。ゲノム配列の解析が当たり前のようになり、得られる情報量が飛躍的に増えています。しかし、情報が増えてもサイエンスはそれほど進展していません。得られた情報から何を見出すのか？我々研究者が、まだまだ分からないことだらけだからです。どうしたらブレークスルーできるのか？一人の天才か？集団か？富士山は独立峰ですが、研究も独立峰もあれば山脈もあります。これからの研究スタイルは、違う個性のぶつかり合いから、次のブレークスルーを生む、山脈のように集団で解決するのが主流になると思っています。皆の意見を戦わせ、協同し、生み出す時代です。

環境微生物系学会合同大会 2014 の実行委員長を仰せつかっていますが、各学会で少しずつ合同大会に対する思いが異なることも見えてきました。もちろん、環境微生物を研究している根っこは同じです。日本の微生物研究は発酵微生物の研究から始まっていますが、北は北海道から南は沖縄、果ては日本海溝まで、さまざまな自然環境がある日本は、環境微生物の宝庫です。それを見極めたいという研究者の情熱ほどの学会でも同じように伝わってきます。米国微生物学会 (ASM) は、病原微生物の研究がほぼ3分の2を占めます。これは、研究に対するスタンスが大きく異なるからです。また、メタゲノム解析を中心とした、絨毯爆撃的な研究は、アメリカ中心です。しかし、網羅的に解析しても、不明な点は不明です。真の自然の姿、その中で生物の生きざま、その営みの中で微生物の役割、まだまだ分か来ことだらけです。富士山頂から見ると四方が見渡せます。しかし、細かいところは分かりません。山脈の尾根を縦走していると、あれが頂上かと思える偽のピークがいくつも出てきます。苦しくて、あれがピークだと思って歩いているのに、頂上までまだまだ歩くということがしばしばあります。研究も同じです。これで完成と思った瞬間に、これは違うのではないかがっかりする。また新たな視点でやり直す。この粘り強さが次の頂上に達する力です。研究が細分化してくると、全体を見渡すのはなかなか難しいです。全体を見渡して、自分の位置を確認し、これからの研究を考える機会とするためにも、学会が合同して大会を開く意義があると思います。いろいろな考えを束ねて研究の山脈を築き、環境微生物学の新たなパラダイムを築き世に出る。浜松から次の微生物研究の種が生まれると信じます。

本合同大会は、環境微生物をキーワードにして、「いろいろな観点から研究を見直す」「視点の異なる考え方から、さらに異なる視点で物事を考える」、ブレーンストーミングを行う機会に出来ればよいと考えます。分子生物学の基本的な考え方を著した「生命とは何か」は理論物理学者のシュレーディンガーが書いています。生物学者が生物学のみにとらわれている時代ではありません。我々はなぜ微生物学を志しているのか？何に挑戦して、何をを目指すのか？今こそ、環境微生物研究を総動員させて、次の世代へ続く持続的発展につなげましょう。その起爆剤となるよう本大会を開催します。皆様の参加をお待ちしております。

(環境微生物系学会合同大会 2014 実行委員長, 本誌編集委員長)